

## Ⅱ. キャリア形成を軸とした総合人間科の取り組み

### 中学1年生

# 「生き方を探る」総合人間科の授業実践と自己表現

木下雅仁・佐光美穂  
中村明彦・西川陽子  
大口悦子

**【抄録】** 「総合的な学習の時間」は、幼稚園・小学校・中学校においては平成14年度から、高等学校においては平成15年度から、新しい学習指導要領の導入とともに全国一斉に展開されてきた。しかし、実際には、すでに多くの学校園において平成14年度以前の移行措置の期間に試行的な取り組みが行われてきている。その結果、本校に入学してくる生徒たちの多くも小学校期に「総合的な学習の時間」の取り組みを行っており、中学校における「総合的な学習の時間」の活動にスムーズに移行することができているように見受けられる。本稿においては、「生き方を探る」という大テーマのもと、キャリア形成につながる総合人間科の学習を進めてきた2003年度の中学1年生の1年間の取り組みを総括し、自己表現に関わって観察されたことを整理していく。

**【キーワード】** 総合人間科 生き方を探る 出会い キャリア形成 自己表現

### 1. はじめに

本校の中学1年生の総合人間科のプログラムにおいては、「生き方を探る」をテーマに、各自が興味・関心を持つ職業や社会的活動について調べ、その営みに従事する社会人にインタビュー調査を行うフィールド・ワークを活動の柱としている。

その際に大切にしていることは、クラスメートや指導担当教諭、インタビュー相手など、自分を取り巻くあらゆる人との「出会い」である。総合人間科の様々な学習活動の場面や機会において、そうした多くの人々との出会いによって自らが高められ、学び、そして成長していけることを実感して欲しいと指導者側は願っている。

ところで、そうした人々との出会いやふれあいによって成立する学びあいの結果、学習の所産として中学1年生が得ていくものとはいったい何なのであろうか。調べ学習のスキルやノウハウ、社会の様々な職業・業種・社会的活動についての知識や理解、あるいは、グループやクラスでの集団学習のマナーや協力姿勢など、この総合人間科の学習を通じては、研究を遂行する上での高度な知識や技能、積極的に主体的な態度などを身につけることができると考えられる。中学1年生の総合人間科が生み出す効果については、これまでも本校の紀要において数多く報告されてきている通りである。(例えば、木下他：2003)

本稿においては、総合人間科を生徒の自己表現の場として捉え、そこにおける学びの意義について考察することを試みる。フィールド・ワークやその成果の発表会、

あるいは、一年間の研究の成果をまとめた研究集録の編纂などの活動のヤマで生徒たちが行う自己表現活動に、どのような意味を見いだせるのか検討していくことにする。

### 2. 2003年度の授業の流れ

#### (1)学年のテーマと目標

先述の通り、中学1年生の総合人間科の学年テーマは、例年、「生き方を探る」である。2003年度は、「探そう、人生の中の宝物」というサブ・テーマを設定した。日常生活の中で、たまたま読んだ新聞・雑誌記事や、耳にした言葉、出会った人などから、力強く主張性のあるメッセージを感じることは誰にでもある。中学1年生では、2度のフィールド・ワークや中学2・3年生を講師に迎えた講演会などの取り組みを通して、できるだけ多くの人と“出会い”、その人々の生き方決定に関わる経験や歴史、細かなエピソードなどに触れ、自分自身の生き方や進路に関わっての方向性を見定めるきっかけを得ようと試みた。(表1参照)

#### (2)学年テーマと「キャリア形成」との関わり

本校で平成7(1995)年度に総合人間科のプログラムをスタートさせて以来、中学1年生では一貫して「生き方を探る」を学年テーマに掲げてきた。当時、本校は文部省(当時)の研究開発学校の指定を受け、「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる教育課程の開発」の実践研究を行っていた。そのフィロソフィーは当時から受け継がれており、“自覚的”という言葉に象徴されるように、中学1年生では、個や個性を尊重し、フィール

ド・ワークに代表される個人研究活動を通して、生徒の内面に主体的かつ自律的に「生き方を探る」プロセスを起動させることをねらいとしてきた。

1年間の取り組みの過程で、第1回フィールド・ワークでは、班別でさまざまな伝統芸術・文化に関わりのある公共施設を訪問し、工芸・芸術職人や学芸員などの専門的知識や技能を持つ社会人の活動や職務について学んだ。第2回フィールド・ワークでは、自分が興味・感心を持つ職業や社会的活動に従事する「専門家(社会人・大人)」を訪問し、生き方決定についての経験談や考え方についてインタビューを行った。

それらのフィールド・ワークの間には、中学2・3年生や教育実習生(大学生)の“先輩”という比較的身近な他者から総合人間科の学習体験談や生き方決定のエピソードを聞いたりもした。

こうした学習経験を通じて、「生き方を探る」という中学1年生の総合人間科の取り組みが、単なる「職業調べ」で終わるのではなく、より多くの社会のさまざまな次元に生きる人々の「生き方・生き様」を知り、また、その人々の考え方に触れることにつながった。それによって、生徒たちが「では、自分はどうのように生きたいのか」とか、「よりよい生き方を見つけるためにはどうすればよいのか」と、心の中で“自覚的”な問いかけを繰り返し、その結果、キャリア形成の第一歩を踏み出してくれていると考えている。

### 3. 自己表現としての総合人間科

様々なアクティビティーが有機的に結びついて総合人間科の授業プログラムやカリキュラムは構成されているが、その中で、「生徒の自己表現」に関わると思われる取り組みをいくつか取り上げて、考察を行うことにする。

#### (1)個人研究とフィールド・ワーク

本校における総合人間科の取り組みの核は、常にフィールド・ワークであり続けてきた。2003年度の中学1年生の取り組みに関しても、その意味づけや実施方法においては、これまでの方法論を踏襲した。これまでのフィールド・ワークの実践の内容については、木下他(2003)などにおいて幾度となく報告されている。

ところで、本校における総合人間科のフィールド・ワークのシステムは固定化された内容・方法に基づくものであるのだが、生徒たちが取り組むフィールド・ワークのスタイルや生徒たち自身による意味づけには、年々、変化が現れてきているように感じる。それは特に、個人研究のテーマ(およびフィールド・ワーク先)選びについて顕著になってきた感がある。

これまで、個人研究のテーマや題材、フィールド・ワーク先を検討するにあたっては、自分の夢や将来の職業と直接的な結びつきを前提とする生徒が多かった。しかし、2003年度の生徒たちが設定した研究テーマや

フィールド・ワーク先の決定過程を分析してみると、「各自が興味・関心を持つ職業や社会的活動」が、純粋に自らの興味・関心に基づいて選定されているケースが多いように思われた。その彼らが持つ興味や関心の発端や動機はそれぞれではあるが、総合人間科の個人研究という学びの場を、進路学習と重なるような単なる「職業調べ」とするのではなく、一種の自己表現活動として生徒たちは楽しんでいるように観察された。(資料1参照)



写真1 『鵜匠の仕事とやりがいについて』



写真2 『心理カウンセラーとして生きる』

本来、中学1年生の総合人間科では、「生き方を探る」という共通テーマのもとに、自由度の高い個人研究の機会を生徒たちに保証することを前提としてきた。それゆえ、各自が興味・関心を持つ職業や社会的活動について調べ、その営みに従事する社会人にインタビュー調査をするフィールド・ワークを行う場合、具体的に自分がイメージしているキャリア・プランと関連づけてテーマを設定しているのか、あるいは、ただ純粋に自分の興味・関心のままにテーマを決定しているのかについては、班別が難しかった。

しかし、このような学習の機会を、単なる職業調べに終わらせるのではなく、自分の興味・関心を“個人研究”という形で表現する姿勢を持つ生徒こそ、たくましいキャリア開拓力を持つと期待されるのではないだろうか。自分のキャリア・コースとは一見無縁な領域で活躍

■資料1 2003年度中学1年生の主なフィールド・ワーク先(第2回フィールド・ワーク)

個人(民間ボランティア) トライデントコンピュータ学校 名古屋市立大病院 青焔美術研究グループ 中央出版編集部 東山動植物園 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 株式会社パワースクエア名古屋市南部地域再生センター 名古屋大学情報科学研究科 インターグループ 名古屋弁護士会 名古屋消防団 中部日本放送(株)制作部 名古屋フィルハーモニー交響楽団 千種警察署少年係 こどもクリニック・パパ 名古屋YWCA 吉岡獣医科病院 メーテレアナウンス部 愛知県警察警務課採用係 東山動物病院 東海女子大学 大工 心の相談室  
 With 動物保護管理センター 東海テレビ制作本部 三菱重工大江工場宇宙航空技術設計部 名古屋大学理学部細胞構築学研究班 名古屋大学総合保健体育科学センター 民間陶芸家 イオンシネマワンダー 株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東海 ボイストレーニングスタジオ・センス&ボイス 石川動物病院 光明幼児園教諭 尾張教育事務所 小野万里子弁護士事務所 犬山鶴飼事務所 鶴舞中央図書館 奉仕第一課 中川創作絵本教室 名古屋市科学館プラネタリウム 名古屋市交通局緑営業所 おやつカンパニー 名古屋ピアノ調律センター 名古屋鉄道株式会社 日本福祉大学社会福祉学部 国際連合地域開発センター 名古屋大学理学部物質科学国際センター 小野万里子法律事務所 名古屋学院大学ボランティアセンター 名南税理法人 加藤毅法律事務所・所長 常磐女学院ファッション専門科 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 ストーンズギャラリー店長 葵ダンススタジオ CBC制作部 滝川いきいきクリニック JICA中部国際センター 天寿病院 日本WHO協会愛知支部 港警察署交通課 ヒューマンアカデミー名古屋校 名古屋大学大学院文学研究科 NPO法人エコワークス なごやかハウス三条 日本将棋連盟東海本部 守山消防署救急救命隊 三栄靴 名古屋テレビ映像技術部 名古屋鉄道名古屋本社 など(順不同)

する人の生き方に触れた上で、自分のキャリア形成にも通ずる何かを発見し、人間が「より良く」生きるために必要な普遍的価値や条件について知ることは、中学1年生の時期には大切なことであろう。

そのような観点から考えると、中学1年生の総合人間科の研究は、グループ研究であっても良いのではないかという反省が生まれる。個々人の興味・関心に応じて生徒それぞれが四方八方に走り回るよりはむしろ、同じ共通する対象から、同様の情報を得て、それを各自の視点から切り込み、自らの興味・関心に引きつけて意味づけを行うという手法によって、生徒間での学び合いをより強固で深みのあるものに発展させることができるかもしれない。

(2)資料作成とプレゼンテーション

個人研究を進める上で、自分が興味を持つ事柄に関連する新聞記事や雑誌記事をスクラップブックに整理し、一種のポートフォリオとして保存する取り組みを2003年度も行った。例えば、「環境問題」について興味があるからと言っても、「環境」という言葉が含まれる新聞・雑誌記事を片っ端から切り抜いて、無機質的にスクラップブックに貼り付けるわけにはいかない。一定のテーマ毎にカテゴリー化したり、同日・同時期の複数の新聞記事を比較したり、国内外別に問題の性質を分析したりと、様々な視点から資料を整理することが望ましい。

総合人間科の取り組みを始めたばかりの中学1年生には、獲得がやや難しい研究スキルではあるが、試行錯誤しながらも取り組む中で、ここにも自己表現の場を見いだすことができる。2003年7月7日に行った「生き方を

探る」講演会において、中学1年生の総合人間科のプログラムを経験した上級生2名(中2・中3)から、これからフィールド・ワークに向けて取り組みを始める中学1年生に向けて講話をしてくれた。その中心的な内容は、効果的なスクラップブック作りの意義とノウハウについてであった。夏休みの間に中学1年生それぞれがスクラップブック作りの取り組みのであるが、どのようなことを意識して取り組めばよいのか、中学1年生たちは熱心に先輩の講話に聞き入っていた。

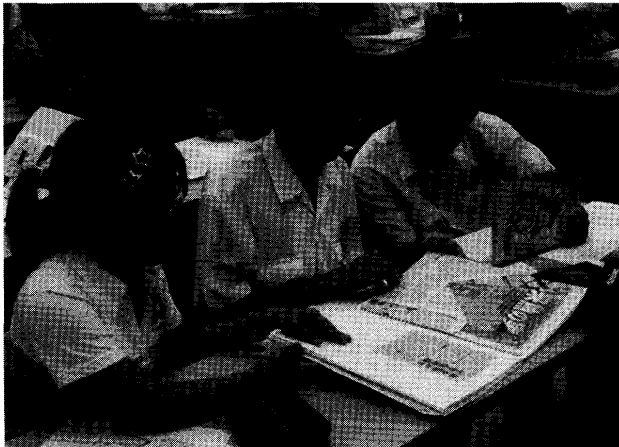
講演者である中学2年生と3年生の生徒が持参してくれた彼女たちが中学1年生の時に作ったスクラップブックは、意図してか意図せずかは分からないが、こうして何年か後に開いてみても、当時の彼女たちの興味・関心が手に取るようにわかるぐらい、実に巧みに資料が整理されてあった。

誰か他人に見せることを想定するのではなく、自分自身が後々資料として活用する目的で整理し続けたスクラップブックであるにも関わらず、そこには確かに学びのコース・デザインが処置された形跡が観察される。グループ毎にスクラップブックを製作して、学習の所産を共有したりして、他の生徒・グループのスクラップブックをのぞかせてもらうことによって、自分の研究を進めていく上でのヒントを得ることも可能であろう。最初は、雑然と新聞記事が貼り付けられているだけに見えるページが続くかもしれないが、次第に記事が一定のリズムやフレームワークに沿って整理され、最終的にはなんらかの研究のまとめが完成すると期待される。

これまでは、個人研究を進める上でのきっかけ作りの意味で取り組んでいたスクラップブック作りであるが、



中学3年生によるスクラップブック作り指導①



中学3年生によるスクラップブック作り指導②

それを個人研究と関わった自己表現活動の場として捉え直すことによって、新たな教育学的意味づけを行うことができるであろう。

### (3)研究収録の原稿作成

中学1年生の総合人間科の学習の最終ステージでは、研究集録とよばれる個人研究の論文集を編纂する。一人あたりB5版2ページという限られた紙面が割り当てられ、「テーマ設定の理由」「プレ研究から分かったこと」「フィールド・ワークでわかったこと」「フィールド・ワークの概要」「フィールド・ワークのまとめ」「フィールド・ワークの感想」「1年間の総合人間科の取り組みを振り返って」などの項目について原稿を執筆する。

ここにおいても、個々の生徒が持つ個人研究に対する姿勢や価値観、選択した問題へのアプローチ方法や学習経験の蓄積などの要素が大いに反映されることになる。これまでは、研究集録の原稿は、主にフィールド・ワークに関わって収集した情報を整理する性格を持つケースが多かった。そこで2003年度においては、その“報告書的”な研究集録原稿作りを脱却し、生徒の学習過程や成長の足跡が確かめられる場を研究集録原稿に求めたいと考えた。そのために、上述のような7つの項目を共通化

し、一定のフレームワークの中でそれぞれの生徒が自分の研究の取り組み過程や成果するようにガイドした。その上で、彼らがどのように自分の研究成果を“表現”するか注目することにした。

資料2は生徒が執筆した研究集録原稿の一例である。原稿執筆規定としての7つの項目が設定されるという拘束はあるものの、原稿のレイアウトや、写真・図表・グラフなどの視覚資料の効果的な利用、各項目ごとのポジションの配分などは、十人十色である。したがって、資料作成技術というよりはむしろ、何に重きを置いて、読者に何を一番アピールしたいのかが表現される場がここにも生まれることになる。1年間の学習の取り組みの集大成だけに、どの生徒のページも読み応えがあり、紙面が工夫されて整理されているのではあるが、うったえかけてくるものには個性や個別的な味わいが感じられる。

これまでは、研究集録を発刊して1年間の総合人間科の学習プログラムを終了させていた。研究集録に収められた各自の原稿は、思い出のページとなり、後々振り返って読む時の記録としての意味合いが強かった。しかし、研究集録の発刊時期を少し早め、お互いの原稿を読み合いながら、“誌上”研究発表会を行ってみることに、新たな学びの機会が生まれる可能性が存在するであろう。

## 4. まとめ

本校における中学1年生の総合人間科の取り組みの様子を毎年観察していると、どの生徒も生き生きと自己の興味・関心を育み、自らの視野を広げ、そして、社会においてより良く生きようとする一市民としてしっかりと成長していく様子が観察される。「優れた個人研究をしっかりと遂行していくこと」を支援しながらも、生徒の研究から何が生まれるのかを見守っていくことが大切である。その観察の視点として、生徒たちが研究の中で、単なる「知識や情報の収集・伝達」といった行為ではない何かをどのようにして表現しようとしているのかに注目していくことの意味について、筆者らは考え始めた。総合人間科の授業プログラム自体は、すでに円熟し、完成されたシステムとして本校においては機能しているのだが、そのシステムを変えようとするのではなく、その意味づけを捉え直すことを試みるのが本稿における筆者らの問題関心であった。生徒が相互に学び合う機会とシステムを今一度見直し、「生徒たちがより生き生きと学びの活動に没頭できる場が総合人間科の授業である」と再定義できるよう、今後もさらに総合人間科のあり方を検討し続けていきたい。

## 参考文献

- ・名古屋大学教育学部附属中・高等学校編著。(2003)『新しい中等教育へのメッセージ』、黎明書房。
- ・木下雅仁、大林直美、原順子、山田孝、山田玲子。(2003)

「ともに学び合う『生き方を探る』総合人間科の授業実践～『出会い』を軸に、生き方決定の足跡をたどる～」. 名古屋大学教育学部附属中・高等学校編.『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』. 第48集.

- ・木下雅仁、佐光美穂、中村明彦、原順子、高橋伸行.  
(2002)「総合人間科の中高一貫カリキュラムの導入期を支える『生き方を探る』実践～『出会い』から人生の足跡をたどる～」.名古屋大学教育学部附属中・高等学校編.『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』. 第47集.
- ・木下雅仁.(2002)「5. 大学との連携をいかした青年期のキャリア形成 ①総合人間科(総合学習の成果) 中学1年」.教育学部附属学校自己点検・自己評価委員会編『2001年度附属学校自己点検・自己評価報告書新しい中等教育の創造—併設型中高一貫モデル校として—」.名古屋大学教育学部附属中・高等学校.
- ・原順子、今村敦司、飯島幸久、木下雅仁、大口悦子.  
(2001)「IV2000年度 総合人間科の取り組み 中学1年生 生き方を探る ～出会いから学ぶ～」.名古屋大学教育学部附属中・高等学校編.『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』. 第46集.
- ・安彦忠彦・名古屋大学教育学部附属中・高等学校.  
(1997)『中・高「総合的学習」のカリキュラム開発』明治図書.

■表1 2003年度 中学1年生『総合人間科』1年間の学習の歩み

授 業 日	学 習 内 容	備 考
4月14日(月)	オリエンテーション(学年テーマ・授業概要説明など)	総合人間科ファイル
4月17日(木)	第1回フィールド・ワーク準備(1)	オリエンテーション
4月24日(木)	第1回フィールド・ワーク準備(2)	班別で係決めと役割分担
5月8日(木)	第1回フィールド・ワーク準備(3)	係別打ち合わせ会
5月15日(木)	第1回フィールド・ワーク準備(4)	交通経路・交通費・持ち物の確認、事前学習プリントの作成、質問項目の検討会など
5月22日(木)	第1回フィールド・ワーク準備(5)	
5月23日(木)	第1回フィールド・ワーク(グループ別研修)	5会場(陶磁資料館他)
5月29日(木)	「生き方を探る」講演会(教育実習生の講話)	第1総合教室
7月3日(木)	夏休みのプロジェクトのオリエンテーション	スクラップブック作り
夏休み中	「生き方を探る」スクラップ作り(新聞記事や雑誌、インターネットを活用)	
9月25日(木)	第2回フィールド・ワークのオリエンテーション	個人研究テーマの検討
10月9日(木)	第2回フィールド・ワーク準備(1)	フィールド・ワーク先の選定、訪問ポイントメント取り、依頼状の用意、質問項目の検討、交通経路・交通費・時刻表の確認、記録の準備等
10月16日(木)	第2回フィールド・ワーク準備(2)	
10月23日(木)	第2回フィールド・ワーク準備(3)	
10月30日(木)	講演会「フィールド・ワークに向けて」	新谷航平(J2A)による講話
11月6日(木)	第2回フィールド・ワーク(個人研究)	個別調査活動
11月27日(木)	フィールド・ワーク発表会の準備	発表原稿・資料の作成
12月11日(木)	フィールド・ワーク発表会(グループ別発表会)	4会場に分かれて実施
冬休み中	研究集録の原稿執筆(1年間の学習活動のまとめ)	
2月19日(木)	研究集録配布、研究成果報告会	研究集録
2月25日(木)	1年間の学習の整理と反省	課題の整理とまとめ
3月4日(木)	次年度「生命と環境」オリエンテーション(1)	テーマや年間学習予定の確認
3月11日(木)	次年度「生命と環境」オリエンテーション(2)	スクラップブック作り

備考:授業はすべて5・6時間目に実施した。12月11日(木)のフィールド・ワーク発表会のみ、4・5・6時間目を使って実施した。

資料2 生徒による『研究集録』原稿の一例

鵜飼こそ我が人生  
～JOBはLIFEにかわる～

テーマ設定の理由

愛知の伝統産業である木曾川鵜飼の新たなスタートを伝える記事(朝日新聞 5/14「愛知総合」～底流～)を目にして、そこでその伝統を継承している、鵜匠という生き方を知りたい。人に大変興味を持ち、第1回目のF.W.(5/23有松校の継承について)との関連性もあったので、是非この機会に調べてみようと思った。

ブレ研究から分かった事

- 木曾川鵜飼の鵜匠は、市の職員である。
- 鵜匠の一日は、とっても忙しい。(特にオンシーズン6月～9月は、休み暇もない)
- 木曾川鵜飼は世襲制を取っていない。(武藤師匠親方の世代までは、世襲制)
- 現鵜飼という取り組みがある。
- 現在活動しているのは、武藤師匠と若手の3人の弟子である。
- 鵜の捕獲は、茨城県十王町断崖絶壁の鵜捕獲場。今年、台風によって被害を受けた。今、全国には11箇所鵜飼をやっている所がある。
- その他、鵜匠という仕事全般について調べた。

F.W.で分かった事

〔武藤さんの言葉〕  
「鵜匠という仕事は、船上で鵜を操り、時には、森や田んぼに、入って鵜飼に必要な道具の材料調達し、もちろん衣装も手作りですよ。また、時には、青広を着て、街に出て、宣伝のチラシ配り…。全て自分達で、(鵜飼という事業を)作り上げるわけですから、(そりや)達成感は、大きいですよ。こんな仕事、他に無いでしょう!」

自分の仕事に誇りを持つ!  
これが、武藤さんの生き方へのベースにあるものである。



仕事という存在の在り方 → 鵜飼 = 自分自信

8 これこそが、武藤師匠の、生き方の原点であり、僕のテーマともなった【鵜飼こそ我が人生】である。

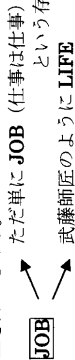
そして、また“仕事に誇りを持つ”・“自分の仕事で自分自身”だというのは、仕事のあり方の

1 番大切な基盤である!

F.W.のまとめ

今回のF.W.で、僕は仕事という生き方の上の1番重要な事を武藤師匠から教わり、仕事という存在の在り方を再確認する事ができた。

仕事 (JOB) というのも、その人の1つの生き方でもある。



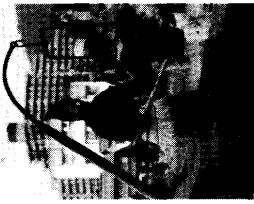
自分にとって、JOBの存在がいかなくなるものだとしても、僕は武藤師匠のように胸を張って、“自分の仕事に誇りがある”、“仕事で自分自身”だと答える武藤師匠が、とても格好良く素晴らしい事だと思った。

今回のサブタイトルでもある【JOBはLIFEにかわる】も今回のF.W.で分かった事の、キポイントである。

LIFEとは、生きがい、人生などという意味で、武藤師匠のように、自分にとってLIFE(=JOB)が確立している人の生き方は輝く、と僕は武藤師匠の話から実感した。この事は、僕にとっても、とても刺激的だったし、仕事の存在と役割の再確認となったと思う。

【星鵜飼】

鵜匠は若手の一人水野さん。「ホウホウホウホウ」という鵜への掛けが鵜飼の雰囲気味わえる。星鵜飼という取り組みは全日本でも初めての事。夜に行う鵜飼とはかわらないが、“鵜の表情まで見物できる”と、評判。日本各地の鵜匠の注目を受け、見学も多い。



F.W.の感想

まために書いたように、今回のF.W.は、僕にとっても刺激的なものであった。自分の未来について立て止まって考えてみた。僕も将来どんな仕事につくかは、まだわからない。

でも、胸を張って、自分の仕事に誇りである、と、答えられ、自分の中のLIFEが確立している生き方を知りたいと思った。そんな、熱いメッセージを下さった、武藤師匠に感謝の気持ちでいっぱいである。

1年間の総人の取り組みを振り返って

1年間、「生き方を探る」というテーマで、2回のF.W.をやってきた。今年の総人では、まず1番に、いろいろいるな生き方がある、全てその生き方は輝いている、それは自分の中に“宝物”があるからだと感じた。そして、生き方探しの糸口となったこと。そして、手紙の書き方、アポの取り方などの社会的な力が身に付いたことだと思ふ。

自分の力も伸ばす事ができたし、「生き方」の意味を改めて理解することのできた、とても良い経験であった。そしてこれから、この貴重な経験をいろいろ場面面で生かしていきたいと思う。

でも、まだまだ「総合人間科」の力が身に付いたわけではない。6年間名大附属の総人の学習を通じて、名大附を卒業する時までに、「総合人間科での取り組みの意味」を理解し、「生き方上手な」自分を作っていきたい。この6年間の中で、中学1年の時に経験した、F.W.(総人の学習)の体験は、とても有意義なものとなると僕は思う。

これから自分の方向性を考えていく時に、今回のF.W.で、武藤さんから学んだ「仕事のあり方」と生きがい」は、僕にとっても、必ず糧となっていく事であろう。

【参考文献】

- ・ 大山ホームページ(海鵜の写真・鵜匠について) (http://www.inuyama.gr.jp/cgi-bin/aragoi.exe?HO MEPAGE/K\_HKENJ.PRG)
- ・ インタビュー・星鵜飼の写真...9/18 鶴岡市にて
- ・ 朝日新聞 5/14 朝刊名古屋本社 愛知総合 底流

F.W.の概要

場所・・・大山鵜飼事務所  
日時・・・平成15年11月6日 3:00より  
相手・・・武藤孝義師匠  
履歴・・・日本ライインの船頭を務めていたが、木曾川鵜飼の鵜匠不足を知り転身。  
約40年間鵜匠をしている。



【海鵜】  
鵜飼に用いられるのは、海鵜。海鵜の視力はなんと5～8!

【インタビュー中】  
武藤師匠には快く迎えて頂いた僕が(餌さの確保にインタビューさせて頂いたのは鵜の管理をする鵜舎、鵜の鳴き声が絶えず聞かなく聞こえていた。武藤師匠の、鵜飼に対する強い熱意が、僕にもわかり感謝の連続だった。

Q:「武藤さんが、鵜匠になって一番良かったと思っ

たと思っ

A:「分らないね。だっ

て言う自覚が、強くあるからね。」

Q:「では、自分自身が鵜飼そのものという事ですか」

A:「うん、まあそ

自分の役割もはっきりと確立している!

→ 大山の財産である鵜飼の継承!